

新釋令義解

五

73

6874

3



新釋令義解第五

五味均子藏

井上綱目藏

職員

職員令六卷八人

勢州 桐官 龜田守良 著

式部省 管卷二

卿一人掌内外文官名帳 謂任後有外官者亦在帳中

新釋令義解 五

73  
6874  
3

新釋令義解第五

水五味均平藏

井上賴田藏



職員令

勢州

祠官

茵田守良

著



式部省 管寮二

卿一人掌内外文官名帳

謂任授簿外更有名帳考其雜造亦可有名帳也

課謂考者考校也課者諸司職掌所課之庶事也言考校一年功過者必先據所職之修不故曰考課

選叙 謂選者選官也叙者叙位也

位記校定勲績 謂勲績皆功也不限文功武功

也 論功封賞 謂論其功勞 朝集 謂諸國朝集使依考

集於此 謂大 策試貢人 謂策試秀才 明經之類也 祿賜 謂位

省也 學校 謂大 學也 祿及臨時 假使 謂假者除六假外皆是也本司判訖

給賜也 類是 補任家令 謂先詮擬申官 功臣家傳田 謂有功

其家傳省 更撰修 事 大輔一人 少輔一人

大丞二人 掌勘問考課餘同中務大丞少丞二人 掌

同大丞大錄一人 少錄三人 史生二十人 省掌二人

使部八十人 直丁五人

式部省は法度や掌事司ふる役もて天武紀イリツカ不法官と記せり後式部と改むるは  
按ふ天武紀以前刑部の號も見ゆれり式部と云  
つる訓讀をもて法官と記せりも知かり式も字書不法也と云 齊帝紀天平字二年の官  
制の全文は大政官、式部省有惣掌文官考賜故改為文部省と云と同年小舊號  
小復まり 式部は唐の吏部小當まり六典小吏部尚書掌文撰勅封考課之政と云  
とあり 文部と改むるは同典に玄宗大室十一載改吏部曰文部至德二載復舊  
とあり 卿一人大室令條もは式部尚書とや載らむむ文武紀大室元年正月小以  
民部尚書直大貳栗田朝臣真人と記せり 元明紀和銅元年高向朝臣麻呂の傳小難  
ゆまは孝德御代より尚書と定められし事八省 日平後卿と記されしとおの由 唐制  
皆同からりしと式部も尚書と云はは明らなり 尚書は三公の少少ありて卿位ありしと  
吏部卿は六卿に見えたる官制なり 内外文官の内外は京官諸國官人

公武令九在京諸司為京官自餘皆為外官あり内は外官に對する詞にて京官をいふ尋常京官の事を内

例あり文官は衣冠の官小て兵杖を帶ぬをいふ公武令小五衛府軍團諸帶伏者為武太宰府三關國及内舍人不在武限自餘並為文と文武官の義を委

記せり大宰三關國は非常の鎮所なる兵杖を設け備へ内舍人は帶刀の職をもて文官ならぬ疑ひあるは不在武限と殊なり名帳

は文官歴名帳なり以有惣掌の故外小任授の帳あり公武令九任授官位者所任授之司皆具録官位姓名授時年月貫屬年紀造簿といひ註不任授簿

帳あり一と云も本条を任授帳と別し歴名帳ありをいふ按任授も歴名も名帳もさきさきからむ此歴名帳は毎年造簿の制を式部

式九五位以上歴名帳毎年正月待叙位官符即奏内裏更字一通進大政官と見ゆ猶公武令任授註不雜造可有名帳と云は雜任の名帳をさきさきと雜造の義

の召使の部曲の類をいふものと脱文あり造部は部曲の簿を造るは此雜造なり又此部は伴部品部を雜色の造簿

をいふ雜任造部の脱文とおもと定めかき事なり雜任の簿は式部式九郡司並祈且祝及夷俘等五位歴名帳別

帳毎年進上す凡内外諸司典以上及諸國史生博士醫師陰陽師弩師補任錯謬者以朱側注此主典以上も官人

は諸司官人の職事不功勞過失の課あり考は比して等第を計り定む考課

を考課と云ふ下考課令一板本に集解の文を混り誤り其考課令所謂課者為課誠之義此條更有策試頁

人之文故不得更為課試之義也三十三字あり集解小課猶計為最勝令

内課字並為此義則無障若用課試之義則此亦課試耳只如官人考課課字無試義不如計義也と云は按計の意とせざるべし然るはあり課を計と

集解別記左馬寮  
馬飼造戸右馬寮  
馬飼造戸云右馬  
造等仕寮為伴部  
造等仕寮為伴部  
造等仕寮為伴部  
造等仕寮為伴部

九等の中中以上より結階をカインモヒトはれて其人を階級に叙するをいふ選叙令に註云選者

選擇也言撰才授官叙者考叙言計考叙位也撰官を撰に授け叙位を計り

撰叙は考課訖して

撰叙は考課訖して

撰叙は考課訖して

給ふといへり選叙と二事 集解奏任以下 式部選叙五位以上位記中務所知也此

司依式加署耳式部先校定成選狀申官則式部叙社案と撰叙を一事とし中

所知は五位以上は勅授して勅處分と中務省受て大政官

に申送る例を以て所知を以ては省施行の加署のみをいふなり

朝廷の敬礼威儀朝廷は大極殿前庭 集解凡失 礼儀者三位以上者遣少

録以上就其位頭為教凡六位以下 式部召其正身為教凡 式部惣知朝廷礼

儀之事如有犯者不論尊卑須教導凡正 若其基家行事縱不合理式部不

輒致凡 彈但是有失礼儀凡正 无疑自式部云彈正在朝廷失礼儀者自加

教諭明法博士鹽居 此省は彈正堂を凡 彈正 式部式は在朝堂者四位以上遣

史生以上五位追喚其身隨狀教諭四位以上 凡五位以上侍宴衣冠不正容

儀違礼者遣錄凡 之但殿上侍臣不在此限とあるは朝儀のみ ならず異常侍宴の日

教ふる凡 下をて威儀の日小朝堂は式部前庭は彈正の掌あり彈正其基の例

元正紀養老七年八月甲午大政官處分朝廷儀式衣冠形制彈正式部惣知

凡彈若其存意督察自然合礼彈正式凡 朝廷儀式衣冠形制基並式

部惣知凡 正と見え同式 凡諸王諸臣威儀進退不合若礼部不礼者喚

と互凡 礼教の省而彈之式部式凡 彈正有朝堂失礼儀者省加教正

事と記せり凡 かく此省礼儀を掌て違失を教諭凡 預て習礼の制あり式部式

小凡賀正之日内外諸司五位已上諸司雜色人諸國四度使雜掌及入京郡司皆

聽朝拜即季冬下旬大月廿八日 惣集諸司預令習礼其參議及三位 凡每

月朔望於曹司廳前引唱上下番史生省掌令習進退容止とあり 版位

は木版其官の位級を書し列凡 處と云ふは立札之儀制令凡 皇太子以

下各方七寸厚五寸顯書其品位式部式凡 踐祚大 錄率史生省掌大嘗官南庭

置自皇太子已下版位とあり官人 列立の地凡 置て 朝賀祭祀の日百官の標列凡 用ふ

此義あり凡 集解凡 刊本曰版列立位といへり凡 字書凡 版下儀制令凡 云下凡 註

定群

臣並百官列位とあるは其詞重なる不似たり  
位記は位階を記せし卷軸なり

下 公式令云云 校定勲績は功勳の事績を校定めて勲位を

加轉の制ありて勲は戦功をいふ文功も云云

あり王功とは征行の日戦功あるを云云

戦死するは著國身死を死王事と記せり

紀小和銅六年四月丁巳制詮衡人物點涉優劣式部之任務重於他省宜論

勲績之日無式部長官者其事勿論焉式部式在京者勲位上下於省考

撰者叙法並同散位之例と見ゆ

武官もれも兵部省小掌事

書も掌文撰勲封考課之政と見ゆ

註小不限文功武功勲位て文官も賜ふ例あり故あり

論功封賞は文武の功勞より其功の大上中下の等を評議て功田或

封戸の賞賜ありといふ

衣服して其功の

功不假といふ

勲績を校定勲位の義論功は

考撰叙位郡司補任の事

郡司補任は考課令

使送省考文を

先於譜第優劣身才能不習甥之列長幼之序擬申於省式部更問口狀

比校勝否然後撰任す

郡司六年成撰と見ゆ

ふり集解小學官為學校言學而校業之所也

也まゝ五縣為遂といふ

此校の義はちまゝも

校も習學の所にて

有校注小校勲經業之所

此校の義はちまゝも

此位記唐下

告身といへり

周礼司勳の條詳小王功曰勲輔成

王之業説文小勲能成王功也

小績

或説小

勲位は

軍防令云云

勲位は

或説小

勲位は

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

賞は功田叙位

願學者申送式部京國共下字館あれと見ゆ

策試貢人は大學寮明經

明法秀才諸國より進士異才の人を貢上此省より試課考課令の制あり

見ゆ策は竹簡を省より問ひ試むる貢人の其答を記す考課令て策試載り

必を策す記すは限る漢籍策制長二尺短者半之文武紀大宝三年七

月甲子詔五位已上奉賢良方正之士貢人の始あらむ以前諸國より人を貢

賢良對策の事始て見ゆ歴代此法を傳へり此外位子を貢るもこれと

策試あり文武紀慶雲四年夏四月癸酉制貢人位子元考之日浪入常選白

實申知事あり祿賜は二季の祿位祿賞賜の類あり賜申此註臨

時の給賜も有と云臨時は別勅して上内藏別勅用物と見えて恩賜をいふ

常例の外を集解祿謂二季依位所給此省勘知自大藏即分給也凡

四季上日所給謂之為祿節日及別勅所給謂之為賜と云下祿令云下

假使の假は假寧令凡在京諸司每六日並給休假一日は官人常例を以て申さぬ

と六假の外田假衣假裝束假私假喪假定省假以上は此省不由を病假おる

假寧令凡請假云欲出畿外奏聞其非應奏及六位以下皆本司判給應須

奏者並官申聞註二省申官轉申聞あり六位已下は本司の判記省不申

の後不省其本司不申送る使は巡察使覆囚使の類此外官使の公事にて

文官は式部武官は兵部あり使は巡察使覆囚使の類此外官使の公事にて

省は人材銓衡の職あり官は使察簡定むら上大政官巡察使應須

巡察權於内外官取清正灼然者充獄令大政官量差使人取強明解法律者上

分道巡覆見囚と見ゆ集解凡諸使皆告官仰式部兵部大政官凡應差使

造請國者大政官先以狀奏聞大事臨時奉勅定名少事令辨官仰式部簡點

省即録名直申大臣と公事の大小を以て集解依私事能退為假依公事

以差遣為使と大略を以てあり補任家令は一品以下職事三位以上

の家小家令あり選叙令小家令等判任帳内資人等式部判補式部小凡諸家

司雖无位猶聽補と見ゆ其家より省不申不下家令職員云



功臣家傳由は功臣の家子孫傳ふ功由て此省功封論賞を掌す功由事も知  
る一田令九功田大功世世不絶上功傳三世中功傳二世不功傳子とあり即ち家傳  
と云一 註説は誤す 註有功の臣家より其家傳ふ功績の事状を述む  
ふも集解も家傳謂功臣子孫嫡々相継状注置也とあり按て案記をみ置と云  
説て功由の事少し此省は按定勳績論功封賞の故有功の事述はも案  
記あり此文は三世二世其家傳ふ功績の事状を述むと云  
功由を述奪也又大中上下の功の家田案記より知るをいふ  
此大丞の別掌て其餘は中務大丞と同 餘は判官の職事より中務省大丞勘問は  
考文の功過違失を勘其責を問あり 中務大丞の勘問も同 式部式  
小丞余録曰申之先被番上考文讀申 隨狀勘問若無勘出則又命長上申  
之錄亦被考文讀申若有乖失隨即勘問 本司主典以上考文を  
二十人は式部式も二十人あり又云史生八人細書權共四人其三人は省扶省掌兼任と  
見の 正八人権三人兼職二人をて十二人を置て類聚國史職官部小公三年 同式部  
十月書生員定為三十人省試手實令出身とあれ書生定められ例見の  
式部史生者試練景逆然後取用亦不得輒補畿外人とあり 省掌之式部式省

掌二九省掌之外置扶省掌二人令習儀式以備其關 又云大丞權史生四人其二人  
とあり此省禮儀教札の事を掌す故あり 大學の史生を 式部式 踐祿大 錄率史生  
省掌大嘗言南度置皇太子已下奏宿語部歌人等版位辰日點檢五位以上豐樂  
院立標引列如常 新嘗 丞錄率史生省掌立標餘節 六月十二月 三省省掌各  
置版位 三省は中務式部兵部して是日 告朔 其日質明省令省掌立漆案於中  
庭乘輿不御之且自掌直立辨官廳前 諸司申送朔 其日平旦省掌於門外計列  
諸司輔已下就座省引諸司入且称容止就版位 云諸司俱称唯自上退出省掌  
且称容止とあり 猶上の版位礼 儀の余り云云 版位礼教の事也掌す 其餘は大政官 把笏の  
事を高野紀神護景雲二年十月癸亥任官 云是日被任官者多不啗庭省掌  
代之称唯於是詔式部兵部省掌始賜把笏と始て笏を取す 任官の日宣不讀上  
は省掌をもて代し称唯せむる自白の如く 官人不考多十斗  
笏なきもいりちして省掌把笏めり 此後類聚國史 職官 平城天皇大同  
元年十月壬申の制中務以下六省の省掌も此二省小准把笏の例とあり 此事は大政官  
中務省省掌

大政官  
職官  
平城天皇大同  
元年十月壬申の制中務以下六省の省掌も此二省小准把笏の例とあり 此事は大政官  
中務省省掌

省學の条  
は云々如し

使部十人式部式下世人とあり

### 大學寮

頭一人掌簡試學生及釋奠 謂依學令大學國學每  
年春秋二仲之月釋奠

先聖孔宣父是其音博士先生者學令云學生先讀  
經文通熟然後講義今依此文明經生必先就音博  
士讀五經音然後講義故別不置生但書生者既立  
貢試法而不載 事 助一人大允一人少允一人大  
比令者文略也

屬一人少屬一人

博士一人掌教授經業課試學生 助教二人掌同

博士 學生四百人掌分受經業

音博士二人掌教音 書博士二人掌教書

算博士二人掌教算術 算生三十人掌習算術

使部二十人 直丁二人

大學寮は學館の惣掌なり故に大學を加へり 大政官大藏  
省の大同 天武紀に大學  
寮諸學生と此寮の事見たり 大學寮は布年夜とよみて寮内は經算音書  
書室なる事官位令云云

各学館ありて、先聖廟堂を建<sup>つ</sup>り、是を都堂大学式凡木工寮工部一人飛彈

二人充寮令修理少破官舎<sup>ま</sup>都堂院中庭並東西道石者式部兵部西省

隨損敷之と見ゆ両道の石は板本大学寮の次不律学博士二人明法生十人

集解釋記の文なるを大字不記を<sup>は</sup>寫す人の誤りるを不意に寫し梓行せしものふれに削り去つ簡試学生は其經術の通否

を試み才能を簡ふるを学令小毎年終大学頭助藝業優長者試之試者

通計一年所受之業問大義八條より一年の成業を試問る釋奠は毎年春秋二

仲月小頭助の博士学生を率る先聖孔宣父を祭るをいへ二仲月は即ち釋奠は二月八日なり

釋奠奠幣の礼容あり義をもて名を負り文武紀大宝元年二月丁巳釋奠之礼

於是と<sup>り</sup>此の時より始むる國学は其國司長官次官孔宣父は贈王の

制なき以前の稱なり魯國の孔丘を異國此後高野紀神護景雲二年七月辛

丑勅號文宣王と見ゆ貞觀政要小貞觀二年詔停周公為先聖始立孔子廟堂

宗開元二十七年制改謚日文宣王於國學と記同十一年詔尊孔子為宣父とあるを玄

と見ゆは此時宣父と文宣王の號は定むる註小音博士の事云は下音博士

云<sup>一</sup>按<sup>一</sup>此文は博士と<sup>一</sup>音博士の条下小あるべきなり釈奠の下小ありき理不

民部省条下小道橋以下數澤以上の事を是も寫し誤り云云陰陽寮条下天文博士の職を論じて註し又

いふ例ありは誤寫と定めか<sup>く</sup>板本なり助以下官員は大炊式翔小大学寮

官人六人此六人は頭助大少允属各式部式小馬料從五位官二人六位

人七位官十三人記之委から博士は大学博士なり文武紀六年五月甲

學丹授大山下位持統紀五年夏四月辛丑朔賜大学士上村主百濟大稅一千

斤とあるは皆学博士二字脱るふ<sup>く</sup>懐風藻小大博士守部連大隅を目錄千

学博士と記せ<sup>る</sup>梅古大学館は学館博士は和名抄部波加世と訓り

本司も其博士と大博士と云ふも知れ<sup>り</sup>博士和名抄部波加世と訓り

波加は博士の音世なり少音訓をかくよませり名義は下学令云云教授經業は学令小九教授正業

周易尚書三礼毛詩左傳孝經論語委く学允博士助教皆計當年講授多

少以為考課等級と<sup>り</sup>教授を專務とせり經業は明經の成業をかま故なりを

考課令不訓道并有法生徒て經業といふ等小術といふ例あり

充業為博士之最と見え<sup>り</sup>課試学生は学令小九学生先讀經文通熟云云

博士考試其試讀者每千言内試一帖三言帖は帖之隱をいふ三言は三言より

すむ講者每二千言内問大義條試三條通二為第通一及全不通これと其處の三字を隠して讀み試

斟量決罰あり是も通不を試み功課を定むるあり 助教は博士を助け学

生不教授の義を號せしあり 學生四百人から代博士一人少く教授 若博士の欠あ

まは補替せらるし 唐百官志國子監博士の条に助教五人此後小直講を置ま

しは集解小天平二年三月廿七日格云直講四人 一人文 一人法 一人同解 一人神龜五年七

月廿日勅曰大学寮置直講三人文章博士一人以前一事以上同助教博士とあるを

始のなるす 高野紀神護景雲元年二月丁亥幸大学寮奠坐直講從八位下

大学直講博士二員置紀傳博士兼和元年四月庚子勅置傳博士加置文章

博士見えて直講は二員文章博士二員小定まは職原抄に直講二人とあるは猶令外

官職考 大学式小直講は見えは 座主博士と記せり唐志國子監の条に 又律学

博士を置まは集解 神龜五年七月廿一日格云大学寮置律学博士二人と見

ゆ即ち明法博士あり 直講と同日の格文より天平三年奏言小定明法博士為正位

とありと明法と見之ぬは彼國は律学と 學生は文武紀布年耶和良波と訓り

のみ云けし是も令外官職考よりいふ 學生は文武紀布年耶和良波と訓り

学令に大学生國學生並取年十三以上十六以下聰令者為之と見えて生年少の稱あり

和良波と云ふ童子をいへ其義を知る戸令役下の条に十六以下為小 分受經業

と制を立り上并い陰陽生曆生天文生藥生書生皆同一 博士は字音誦讀の師より書をよむは

も学令に凡博士助教皆分經教授學者每受一經必令終講所講未終不得改業

と見えて學生は各一經つ博士の教授を分受をいふ 唐志に國子監博士五人の条に

二分其經以為業と分教の制ありて 五分其經為業算學博士二人

助教博士分經此制して時より 音博士は字音誦讀の師より書をよむは

漢音を用ふし持統紀五年九月壬申賜音博士大唐續守言薩弘格銀人二十兩

類聚國史小人の下小光仁紀小室龜九年十二月庚寅玄菟頭從五位上表晋卿傳小

表卿唐也天平七年隨我朝使歸朝時年十九學得文選尔雅音為大学音博

士此博士小唐人を用ふるも漢音四声を教ゆを明らむし 續後紀承和十二年

朝臣真貞傳小真貞以三傳三礼為業但舊末不學漢音不辨字之四声 二月丁酉散位善道

至三教授惣用世俗踏躑之音耳とあるは按は字音館にて四声を教ふなり

掌教音は音生小教授をいふ学令に假前一日博士考試其試讀者每千言内試

一帖三言とあるは博士の課試より下され音生を置りより上 大學註小学令

云字先讀經文通熟然後講義とあり今此令文小依り不明經學生は必先つて音

博士不就王經の音を讀習ひ其後小經義を講學せられたる小音生を置きたるなり  
但書生は貢試の法を承りて此小書生を載し保は文の略脱と云へり音生は音義を兼習せり  
はれど館中此學生は皆音を受け一生あり書生は註小貢試を去は學令小凡書生以  
寫書上中以上者聽眞と稱せりいふは必書生を記するに略文のなり此文  
畧の義は詳らむるに明法生の如く脱文はいふは略文の心得て小按り學生は年  
十三以上入學の制あり十二以下は遊戯を空しく年月を送り入學の年を待たざり  
か古の教り人生八歳則自王公以下至於庶人之子弟皆入小學而教之以書數之  
文と大學集註の序に志るせば年少の俗書を習ひて年十三以上は書博士不就  
習ひ考試の上中等は眞せり寫手史生小補ふれと講學を兼するは明經を  
もて貢せらる學令小凡學生雖講說不長而閑於文藻才堪秀才進士亦聽筆送  
の例より學生の經業充たれ書の才能も貢せらるいふは書生也即音生小  
同略文はありを聞ゆされと傳ふ説るは猶よく考ふべし

此令後小漢語師漢語生新羅譯語渤海譯生を置きたるも見ゆと音生を  
いづく異あり聖武紀天平勝宝五年正月乙未大政官奏稱諸蕃異域風俗不同若  
無譯語難以通事仍仰粟田朝臣馬養播磨直眞身奉朝元文元貞  
等五人各取弟子二人令習漢語者詔並許之日本後紀弘仁八年四月丙午勅云云  
宜擇三十以聽令之使入色四人白丁六人於大學寮使習漢語大學式小凡漢語  
師並生賜時服とあり漢語は唐の俗語して漢音小あり新羅語は女子謙紀天平勝宝  
五年正月乙未令美濃武藏二國少年每國二十人習新羅語為征新羅也日本  
後紀弘仁四年九月乙寅官符不應傳對馬嶋史生一員置新羅譯語一人事右得  
大宰府解備新羅之舟來著件嶋言語不通來由難審云云置件譯語者右大臣宣

博士

奉勅依請式部式小凡勅海譯語生有隨學生容貌端正者二人充應得其  
業者預得免之例と見えて漢新羅渤海三國の譯語を記せり譯語は俗通事と  
いふものなり通事と云も既く推古紀十四年小野妹子臣を遣はし通事鞍作福  
利といふ人見通事を平佐古止と点ありを即ち譯語なり今の世筑前國長崎港小通事  
ありて異國の語を通事と云ふ也通事の始るる處書博士は書を授り師あり持統紀五年九月  
壬申書博士百清末士善信見ゆ此書を立加岐と訓り手書を俗小手迹とい  
へり凡て書を立といふ事  
内藏寮寫書手の条小云へ漢書郊祀志小掌教書は學令註小書生  
天子識其手迹云手謂所書手迹也被國とも云へ  
唯以筆迹切秀為宗不以習解字樣為業唐制と異りて字樣を解き  
曉るは唯其手の秀るる故  
業と云は寫書手類聚國史職官小弘仁三年十月書生員定為三十人省  
試手實令出身寫書生の貢試見ゆは後小書生を置きたる故り令條に載せ  
ぬは音博士の唐百官志小書學博士二人助教二人石經  
說文字林為顯業兼習餘書とあり  
條小云如學生の兼するも有下  
筆博士は筆を取て數を計り師あり筆は竹長六寸以計歷數者也  
按小此筆竹を縱横クラコ小布きて多寡の數を計ふ術なり筆竹は五十本を用ふといへ  
る今も十露盤を用ひ筆竹  
ふけまると比法を筆術と  
云へ猶學令云云學令小書筆取業術優長者博士の制見ゆ

筆生三十人は集解天平二十一年六月八日格云筆生无卅人今定廿人  
也武部博士並生得業生を同解神龜五年七月廿一日格云得業生  
見之に傳められり記  
生三人文章生二人明並取生内人性識聰惠藝業優長者云也此得業筆生  
法生二人筆生二人後小は見  
に使部二十人武部武部使部十人見の使部直下を此處に載るは寮  
院小各学館ありて隸管を曉せ  
引中務省儀制令を考ふ小書音筆博士は各一司といひ別館あり故らむ  
の例も同  
大学寮院内  
各学館あり

### 散位寮

頭一人掌散位謂文武散位名帳朝集謂諸國朝集  
皆惣掌之也使皆於此寮

判其上 事 助一人允一人大属一人少属一人  
日也

### 史生六人使部二十人直丁二人

散位寮は散位惣掌の司あり日本紀略云寛平八年併武部省と  
いへり散位の職事なく位階のみをいふ文散位武散位の二色あり武散位  
は勲位  
不致仕辭職元明紀和銅七年八月乙丑制散事五位應加賜祿自今以後勲  
の令散位と云下散位の制もこれあり聖武紀天平三年十一月丁未大政官處分  
位在京如散位之例勲位と文位なきは散位の制もこれあり  
武官解任者先例並属武部不便自今以後令兵部掌焉但正身依旧在京上下  
とあり武官解任して位階のみあるは即ち散位あり此寮隸  
られ武部省小属くを便利ならむと始て兵部の掌と云り大宰府老の制は文武  
散位も小武部省の掌ありを此時武散位は兵部省の掌を制とあり今掌ま  
り  
此散位五位以上も管と六位以下は文散位武部省武散位兵部省小  
分番上下もて其職を散事とて其職掌を分けて上日上夜を勤むる也  
るも旧制は不便と云武部小属武散の兵部直番と云ふも有  
い選叙令云散位云六位以下分番上下とあり唐百官志吏部尚書の条云散階自  
四品皆番上於吏部也兵部尚書

の条に武散階自四品以上皆者上於兵部とて文武散位の人と多きを聖武紀  
四品より分當るを皇制は六位已下小言れりかくて文武散位の人と多きを聖武紀  
天平三年十二月庚寅定武散位定額員二百人とて定額員數同七年五月乙亥

畿内及七道外散位及勲位始作定額國別有差自餘准格納資贖勞と始て資錢

の課を立れり在京の散位定額ありて諸國の散位も同例を定の資錢を収めり

の納錢は知りかき職事の勞代りたる制にて唐の本つけあり其格文見えたり多寡  
錢收課一月三十文と制見えり資は資錢を輸めり功課考撰の法とて不

輸は不功と定むる事かかむ詳なる義は今考へかたされも分當は六位已下より五位以

も分當多く資錢を輸せしむるあり唐制小品子錢の法ありて文武六品以下勲官三品

以下五品以上子年十八以上小輸せり三歲納の法は其才能を量り文武散官を授くる

法なり品子は此令小位子と記八位以上の子をいふ此納課を身せしむる制なり  
唐食貨志に歲納錢千五百謂之品子課錢とあり皇制此法を以て資錢を考へり小

引出同九年冬十月丁未停額外散位輸贖勞錢と外額の課錢を停め定額散位

小輸せり旧制は定額額外の限なく文武散位の制は見えり  
散位はをりて輸せしむるなり文武散位も武散位と

資人共二百人為定額典考自餘額外情願輸錢贖勞者一依前格處分とあり

此陰子位子小輸錢は即ち唐の品子課錢と同一其納法は考へる資人は本まより

薦の責を考説て武部省小留まり叙位をまはる程は散位陰子の例小同りりは

載るなり叙令小云一額外納錢を停めり同八年十月癸未勅曰定額

及額外散位等輸贖勞錢宜得自今以後一依令文と此時小停められ令文一依て

分當上下の旧例小復せり名帳は文武散位の歴名帳なり此奈物掌の故小掌に

已分當宿直を檢知す朝集は諸國より毎年上京の使人を考課令小九

大貳以下及國司毎年分當以一年為一員調考撰拜朝官及省小釐務の事

を申し返抄を得て其國小歸る不と此察し分當の上目を考へる法あり國の使は

人して其國より職事ありて集解小辨官武部兵部並散位京共掌朝集其辨官

武部兵部者為申雜務並考選事唯散位察為判上日也此察判其上日者武

部點申於官請外官下國耳と見ゆ此註は朝集使の下國官符

治部省 管寮二司二

卿一人掌本姓謂猶言姓其姓氏者 繼嗣謂五位以上嫡子也

繼嗣令定五位以上嫡謂五位以上嫡妻凡為 婚姻謂五位以上嫡妻凡為 子者陳牒治部是也

也 祥瑞喪葬贈賻謂官位曰贈財貨曰賻凡贈位者 中務作位記此省受取付死人家

也賻貨者死人本司申大政官官下國忌謂先皇 崩日也諱

謂諱避也言皇祖以及諸蕃朝聘謂國君自來曰朝 使卿大夫曰聘 下名號諱而避之也

事 大輔一人少輔一人大丞一人少丞二人

大錄一人少錄三人史生十人

治部省は天武紀小理官とあり如く理事和名抄平依羊留の司あり都加依と云此義あり 奉帝紀小天

平字二年八月の制小治部省僧尼賓客誠應尚礼故改為礼部省とあり此時

の號を改日勿せられしを同八年小旧號小復す事上文小は是等より職原抄小

治部省周礼春官大司馬之職也天地神祇之礼此官之所掌也本朝又當省掌

礼喪儀兼兼礼をかくるを唐六典小礼部尚書云其属有四曰礼部二曰祠部三曰

膳四曰主客とあり祠部は神祇官の条云云如く 寮二司は雅樂玄蕃二

寮諸陵喪儀二司あり 本姓は諸氏譜因を云ふるし 譜因は今の系図帳 本は本

部本貫の本を假宣令不實の父母を本生といふ如く 實姓なり 註小本姓は猶

姓の如く存する其姓氏は人の根本の故不連ねいふがかり 根本の姓と云ふ理は

事から本姓の義と連り



儀制令云鳥類之類有生獲者仍遂其本姓放之此本姓は俗子生すもの實をいふなり是を  
も助けいし生すも根本ありといふは素姓の義なりは左氏傳桓公  
不因其以賜姓の鄭玄說小姓者其本也長者其支也といふは取て根本と註せらるる  
されも其人の實生を知りて冒姓假姓の奸謀を禁むる義なり集解小天下諸氏高  
野紀天平宝字八年七月丁未先是從二位文室真人淨三等奏曰云戶令曰近江大

津宮庚午年籍不除蓋為氏姓之根本過歟之乱真歟と見ゆは古此年籍  
をもて姓氏の真偽を糾正する事ありけむ桓武紀延暦元年六月乙丑元人建麻呂  
男女神野真人淨三等改爲真人從本姓初建麻呂冒稱仲江王事奏而自經

其男女亦爲真人至是改正之す同七年十月庚戌播磨國楫保郡人外從  
五位下佐伯直諸成延暦元年籍冒姓至是改正焉とありも此省の處分あり

繼嗣は繼嗣令註繼嗣所謂子也其家を繼く同令云凡定五位以上嫡子者  
陳牒治部治部式云凡五位以上嫡子者父申牒省移本貫知實然後申官集解  
小五位已上定嫡子者申送治部移式部勘籍知實立身と見えて五位以上の家の嗣子

此省より申送て處分を受けて定むるをいふ六位以下の例は 婚嫁も凡令云凡男年十五

女年十三以上聽婚嫁と有り婚は男の娶れを行は嫁は女の夫家へ嫁ぐをいふ戸婚律の  
不取小五位已上男女兩家婚嫁は省に陳牒す處分も繼嗣の制と同かす此  
省本姓を知りて案記ある事と云ふ令云凡又案云婚田如此之類註小婚者五  
位以上妻名帳也といふ

婚嫁す其生子の事まで兼知ると有り按小男女婚嫁註は其理生子あるは兼  
偽真を驗察のしめありむ此胞字義解集解にも小胞小作也羽倉東麻呂本小胎伊  
藤東涯本小死小作也按小肥死は誤也志る胎は婦孕三月曰胎といふ計は胞子  
といふ俗小惠奈といふものありむと生子を胞といふは胎を指す也胎の字畫は似  
實を志る故事の依て註者の記も定めかたき故あり 祥瑞も孝德紀白雉詔小自古迄  
今祥瑞時見以應有德其類多矣とありて吉祥の瑞物の類もいふ麟鳳の類下

儀制令云云一喪葬は喪制葬儀あり喪葬令云散位治部大輔監護喪事三位  
治部少輔監護三位治部丞監護三位以上及皇親皆士部示礼制と有り礼制は

又按小生胞は生腹  
と云ふ如令誰腹  
出生ると云也

五

制 贈賻は死者小贈位られ賻物を給ふり文武紀大宝元年正月己丑大納言正

廣參大伴宿祢御行薨遣直廣壹藤原朝臣不比等就第宣詔贈正廣參右大

臣 贈位贈官の例 喪葬令凡職事官薨卒賻物云云註小送死者曰賻と見ゆ

註小官位を贈と云ふ財貨小賻と云ふ例あり贈位も中務省位記を作し比省受取り死

人の家小付く 上より大納言の例は 賻の貨は死人の本司より官小申し官比省小下

符あり省其數を量り考へ申せ大藏省より出給ふり 數を量り初位

故 按小喪葬令小五位以上身喪奏聞遣使吊とあり 贈位は此使の便給ふ

まは註小いへるは六位以下の例あり 賻は治部式小凡應給賻物者喪家申官

官下符左京職以數倉院所納物給之 京職式小凡賻物者先申官と見ゆ

國忌先帝の崩日をもて國家佛齋を行ふ日なり持統紀元年九月庚午設

國忌齋於京師諸寺とあり始めたり 同三年二月乙巳詔曰自今以後每年取國

忌日要須齋也と見ゆ 九月庚午は天武天皇の崩日なり 國忌を波瀾の日とよむ崩日の意あり 註は皇祖以下の御名

をいふ避て申さぬ義を諱と云 諱字は異國にて名を 皇國にて天皇の御名を諱て申

さぬ例なきを 大御名は皆稱 申せは避 事宗神紀の歌小大御名をよみ

本磐余彦天白王諱彦火火出見ま 仁賢紀小諱大脚とあり 自餘天白王不言諱字

而至此天皇獨書者 抄旧本 耳とあり 德計天皇諱大脚更名大為字嶋即と諱

字ありを 顯宗紀小德計王更名嶋稚子更名大石尊と見ゆ 神武天皇の御名も般余彦火火出見

尊ふと改んて記せざるなり 漢風を用ひ其制度小從ふり 諱名の事は始てけむ

上代小名をいむと云ふ 禮記檀弓篇の古注云古者生而不相諱卒矣乃有神諱といへて死後小生前の

名を諱せ例ふり又云逮事父母則諱王父母不逮事父母則不諱王父母とあり

てて尊むべき人の名を諱さると云は異國の風俗なり 取らざるものなり 高野紀

神護景雲二年五月丙午勅入國問諱先聞有之況從今何曾無避項見所

司入奏名籍或以國主國繼名向朝奏名可不寒心或取真人朝臣立字以氏作

字是近冒姓復用佛菩薩及賢聖號每經聞見不安于懷自今以後宜勿

更然昔里名勝母苗日子不入如此等類有先著者亦即改換務從禮典 此項

名小孔子 釈迦 阿弥陀 桓武紀小延曆四年五月丁酉詔云臣子之禮必避君諱 此者

菩提等と見えり

先帝之御名朕之諱公私觸犯猶不忍聞自今以後宜並改避於是改姓白髮部  
為真髮部山部為山天皇の御諱と避へき御制也を始て記せり 先帝は光仁  
天皇諱白壁

王桓武天皇諱山部と申せり故小白字山字を改めり以前御代人小から勅勅は  
ふらら部字をいませぬて礼記礼不編諱とある小松よりあらむ

見えに按り天武天皇諱天清中原麻真人持統天皇諱高天原廣野姬文武天皇  
諱天真示豊祖父元明天皇諱日本根子天津御代豊國成姫元正天皇諱日本

根子高瑞淨足姫聖武天皇諱天璽國相豊櫻彦孝謙天皇諱阿部尊號字  
稱德孝謙皇帝と申し奉りは御名之字い多ていつを諱みさくへきも知るか  
はれて此勅なく新令脩まてり

皇紀大同元年壬六月戊戌改紀伊國安詳郡為在田郡以詞涉天皇諱也 此天  
皇諱

安殿と稱天安殿嵯峨天皇紀小大同四年九月乙巳改伊豫國神野郡為新居郡以  
を阿氏とよみたり

觸上諱也 天皇諱賀美能  
又曰神野とあり 淳和天皇紀小弘仁十四年四月壬子改大伴宿禰為伴  
宿稱觸諱也 天皇諱大仁明天皇紀天長十年六月癸巳天下諸國人長姓名及郡  
伴と申せり

卿山川等號有觸諱者皆令改日と 天皇諱 見たり  
平城嵯峨の御代より御名も  
二字と始て定の給ひ諱避く  
へき制を立られは 三代實錄元慶元年四月壬申清和天皇御諱の事大江

漢風とあり

朝臣音人奏議云諱案執虞夏疑要云古者臨文不諱而今猶以為諱嫌名不諱  
而今猶以為諱二名不偏諱孔子母名徵在言徵不言在言在不言徵今亦不偏

諱若據孔聖之前蹤唯注御諱之一字隨禮隨俗儘得其宜乎と御諱も二字は避  
さる諱をいへり 清和天皇諱惟仁と申せり二字もいへり例は桓武天皇諱山部淳  
和天皇諱大伴と稱せり山部の字を諱て部伴二字をいせり如くも一天皇  
諱の議も此時是れなり此注文より皇祖以下と云儀制令平出の条より皇祖不及曾高  
と云ふれり集解に假令名有春日王者春日山者稱東山耳と云は誤りたるへし先  
仁天皇は田原天皇の第六之皇子より桓武天皇の御祖父と云ふは田原天皇諱施基  
皇子より大和國磯城郡の名を改められ制度見えたり當御代の大御名をいみせり事  
をかく御制あり名を辨論せり

諸蕃朝聘は唐新羅の國を蕃國と云 此外夷  
國といふ

使卿大夫曰聘といへば春秋公羊傳又を令く取て記せり 礼記王制篇小諸侯之於天子  
也比年一聘三年一大聘五年  
一朝注下比年毎年也小聘使大夫大  
聘使卿朝則君自行也と委く見ゆ

朝聘の義は事ながら王子より其臣の自王  
國より來つる事のみて蕃王の入朝ふけまはた貢使をかくいふ

異國朝聘の義は  
深く泥むべきあり

板本又聘字脱り古本より補へり 史生は式部式治部省史生十人あり

史生は式部式治部省史生十人あり

史生は式部式治部省史生十人あり

大解部四人掌鞫問譜第爭訟

謂窮問譜第之爭訟  
定其族姓之次序其

解部是為別同

不在同員也

少解部六人掌同大解部

省掌二人 使部六十人 直丁四人

解部は争訟のり或解部より省の司なる中務省の内記監物の如し

考ふて勘解使の解の義は持統紀四年正月丁酉以解部一百人并刑部省より

を新令の制小比省より置てあり

鞫問は其本姓の支別を窮問以争訟情

を志り解くをいふ鞫は詰訊して窮詰

別に分家とふるは其其情曰鞫と云書あり

勝宝元年二月壬戌勅曰頃年之間補任郡領國司先於譜第優劣身才能云云武部

更問口状比較勝否然後選任或譜第雖輕以勞薦之或家門雖重以拙却之

是以其緒非一其族多門苗裔尚繁濫訴無次各迷次云云自今以後宜改前例

簡定立郡以来譜第重大之家嫡々相繼莫用傍親終塞争訟之源永息竊

窬之望云云武部は郡司の譜第をいふ

ふをいふ其氏の本支より任叙の制

から丁元恭紀四年秋九月戊申詔曰群卿百寮及諸國造等皆各言或帝王之裔或異

之天降然三才顯分以來多歷萬歲是以一氏者自心更為萬姓難知其實故諸氏姓

人等沐浴齋戒各為盟神探湯云云金探湯則得實者自全不得實者皆傷是

以故詐者愕然之豫退無進自是之後氏姓自定更無詐令見ゆれ争訟の事絶

えり云云天智紀十年丁未午籍帳を造り此事は戸諸氏の様を定の給へも猶

氏姓の訴輟まきりけは此職を置て争訟を解りぬり

其訴を窮問以其情理を

解き標て了訴状を連ね

省小申一處分せしむる 孝謙紀天平勝宝三年二月己卯典膳正六位下雀部朝臣  
 は刑部省の解部小同 貞人等言般余玉穗宮諡繼勾全崎宮諡安御宇天皇御世雀部朝臣男人为  
 供奉而誤記巨勢男人大臣真人等先祖云望請改巨勢大臣為雀部大臣陳名  
 長代正保後胤大納言巨勢朝臣奈氏麻呂亦證明其事於是下知治部依請改正  
 焉との此類は多かり 此は氏姓の誤り 少解部六人桓武紀延暦十八年四月辛丑  
 減治部解部四員との 或説は太少係せし買員少解部を減りしふは太在買員を故り  
 此解部延喜式小見元 刑部省の解部は大同三年の格文より 使部六人式部  
 式治部省使部二十人省掌二人又扶省掌二人との類聚國史職官小大同元年十  
 月市治部省省掌准式部兵部二省聽把勢と見ゆ 三代實錄貞觀十四年八月  
 二人と記せり一本小 置作省は誤りなり

雅樂寮

頭一人掌文武雅曲正儂 謂元于戈者曰文 雜樂謂  
 有干戈者曰武 邪

曲正舞以外 雜樂也 男女樂人音聲人名帳 謂樂人音聲人男  
 女相雜既非一色

故先稱男 女以被之 試練曲課 謂音聲曲度各有大小 事  
 課其程限試其成功

助一人大允一人小允一人大属一人少属一人

歌師四人掌教歌人 歌女師二人掌臨時取有聲

音堪供奉者教之 歌人三十人 歌女一百人

儻師四人掌教雜儻 儻生一百人掌習雜儻

笛生六人掌習雜笛 笛工八人 謂供此國樂而吹笛者其唐國

以下諸樂者吹笛之人各在其樂生之中也

唐樂師十二人掌教樂生高麗百濟新羅師准此

樂生六十人掌習樂餘樂生准此

高麗樂師四人 樂生二十人 百濟樂師四人

樂生二十人 新羅樂師四人 樂生二十人

伎樂 謂兵樂其腰鼓亦為兵樂之器也 師一人掌教伎樂生

腰鼓師二人掌教腰鼓生

使部二十人 直丁二人 樂戶

雅樂寮在和名抄官職小字多末比乃豆加佐とありと歌儻樂の三色を掌司り雅は正の義より俗樂と已けり 大雅詩序小雅者正也言王政之所由察興也といひ樂俗樂二部と見ゆなり 唐制も同制度あり 文武は文儻武儻なり其儻小千文を掌司り武と云ふは千文は盾戟を千と云ふは久米儻楯臥儻筑紫儻波理儻邪禁女儻は

武と一五節儂田儂倭舞の類を文と云一此儂とは唐六典大常寺の条云儂之制左執籥右執翟二人執纛以引之舞者六十四人武儂之制左執干右執戚二人執旌居前二人執鼗鼓二人執鏡以次之二人執相在左二人執雅在右儂者六十四人儂者委貌冠革帶烏皮履武儂服平曰免餘同文儂と見ゆ蓋は笛干は盾戚は大斧纛は旄牛尾をかける旌相は

雅曲

は毛詩序小雅正也曲不直也と見ゆれも節奏の音聲もゆる序破急ゆるをいふなり詩序小節奏有正曲之聲為疾舒之程礼記樂記篇小訊疾以雅注小訊治也舞失節曰疾奏雅以治舞之疾言樂舞有節也と見ゆれも音聲の緩くす急なる節をいふと云ふなり

正樂は雅樂なり

雜樂は正樂の外小雜々の樂あるを

いふ註小雅曲正儂と云は詳かふに雅曲を下小連ね雅曲儂の男女樂人音聲人

名帳は歌舞樂三色の人男女も相雜なり一色はつねをて先づ男女を上下載

ころとふり音聲は歌人をいふ此寮物心聲の故小名帳あり按小樂に女

歌女あり故小試練曲課の曲は節奏の名をて夷曲茅原曲といふ曲なり樂音聲小

茅原曲廣瀬曲八雲刺曲といふ名あり神代紀小夷曲といふ事記小夷振と記

臨時取有声音堪供奉者教之て臨時小宴樂の日歌女の歌垣小供奉事あり

其家其女は定まぬふり天武紀四年二月癸未勅大和河内等選所部百姓之能歌男女及侏儒伎人而貢上と見ゆるは此歌を取始よりむ雅樂式小歌女者

取唐女容貌端正有声音者充之集解別小不限國遠近取能歌人也

云供奉の歌女あり歌人三十人は歌師の教を受る弟子あり歌女一

百人は類聚國史職官小桓武天皇延暦廿四年十二月壬寅公卿奏議云雅樂

歌女五十人減三十人仕女一百十人減二十八人許之仕女は此寮の雅樂式小歌

女三十人五十人を三十人を減せり歌女居地一所在右京三條四坊八

町あり歌女師の条小臨時取唐女充といふは此一百人の外も供奉の足らざる

臨時云全文上より集解小歌人歌女樂生等不得考但時行事皆得

考と見ゆ序別勅授位のものあり此三色も供奉の人を以て後小内教坊歌女

神代紀小夷曲といふ事記小夷振と記

茅原曲廣瀬曲八雲刺曲といふ名あり

臨時取有声音堪供奉者教之て臨時小宴樂の日歌女の歌垣小供奉事あり

其家其女は定まぬふり天武紀四年二月癸未勅大和河内等選所部百姓之能歌男女

及侏儒伎人而貢上と見ゆるは此歌を取始よりむ雅樂式小歌女者

取唐女容貌端正有声音者充之集解別小不限國遠近取能歌人也

云供奉の歌女あり歌人三十人は歌師の教を受る弟子あり歌女一

百人は類聚國史職官小桓武天皇延暦廿四年十二月壬寅公卿奏議云雅樂

歌女五十人減三十人仕女一百十人減二十八人許之仕女は此寮の雅樂式小歌

女三十人五十人を三十人を減せり歌女居地一所在右京三條四坊八

町あり歌女師の条小臨時取唐女充といふは此一百人の外も供奉の足らざる

臨時云全文上より集解小歌人歌女樂生等不得考但時行事皆得

考と見ゆ序別勅授位のものあり此三色も供奉の人を以て後小内教坊歌女

儂師四人を類聚國史職官云大同四年三月丙寅定雅樂寮雜樂師歌舞師四人

集解古記云大同四年三月廿八日官符云定雅樂寮歌所人儂四人筑師諸縣

師一人在此中云は同格云て此時雜樂師歌師舞師各四員定のうれもも

此後弘仁十年十二月廿一日官符云定雅樂寮諸司數儂師四人倭儂師一人点部

師一新羅樂師二人今定二人琴師一人儂一人其員を減れり格集解

古記云記り点部とありは詳からず古志部の誤らむり教雜儂は數色の

儂一人は儂師云は一上は儂師四人とありて師云は三文あり小墾田は大和國地名ふ

儂曲を教授ふり天武紀十二年正月丙午是日奏小墾田儂云は倭儂の旧名あり

此後倭儂は見ゆれり推古紀二十年二月伎樂儂云は吳國の儂云は

小墾田の儂は物見及り推古紀二十年二月伎樂儂云は吳國の儂云は

六年三月丙子撰津職奏言吉師部儂云は考へり和名抄云は撰津國考謙紀天

平勝宝元年三月丁亥天白王上天皇行幸東大寺云は唐勃海吳樂五節田儂久米儂云は

同四年四月乙酉行幸東大寺云は雅樂寮及諸寺種々音樂並咸云は復有云は諸氏

五節久米儂云は伏踏歌袍袴等歌儂東西谷聲云は分庭而奏所作奇偉不可勝

記云あり他見ゆれり集解別記云大属尾張淨足云は説云は有云は奈舞曲等云は右久米儂

大伴彈琴佐伯持刀舞即斬土蜘蛛云は唯今琴取二人儂人八人佐伯大伴不別

あり佐伯氏は大伴氏の支別云はありは土蜘蛛は神武紀云は高尾張邑有土蜘蛛其為人

也身短而手足長其侏儒相云は口類皇軍結葛綱而掩云は殺云は之云は此云は事云はあり

余汝直帥云は久米部作大室云は於忍坂邑盛設宴云は猶繁其情難測乃顧勅道臣

醉時道臣命乃起而歌云は曰云云我輩聞歌俱拔其頭推劍云は一時殺虜皇軍大悅

仰天而咲云は因歌云は曰云云今來自部歌而後大唱云は是其緣也云はありは此云は歌云は事云はあり

在云は其室待伊那流云は八十島師云は土雲云は八十建云は五節儂十六人云は五節

弟云は本朝月令の説云は記云は五節儂者洋御原天白王之所制之相傳云は天白王御吉野

宮日暮彈琴有興云は云神女髻髻應曲而儂云はいはるは附會の説云は信云はか云はり云は聖

武紀天乎十五年五月癸卯宴群臣於内裏皇太子親舞五節云は詔詞云は飛鳥淨

見原宮云は大八洲所知志聖乃天皇云云所思坐云は此儂云は始賜云は比造賜云は比支云はと見云はり

昭公元年の条云は先王之樂者所以節云は百事也故有五節云は注云は五声云は之節云はと云は此

義云はより西宮記云は辰日新嘗會云は豐明賜宴云は五節儂云は云云は舞云は有云は五節云は五節

別云は回云は合云は五迴畢舞云は姫云は一退云は出云は江次云は第十月豐明節云は會云は小云は舞云は袖云は五返云は故云は曰云は五節

と舞云は狀云は田儂云は天武紀十年五月乙酉朔辛丑天皇御云は西小殿皇太子群臣侍宴云は於是天田

臣東宮極深殿第云は云東門覽云は耕田農夫田婦雜樂云は師儂人四人云は倭儂師儂也

皆作云はと云は耕田播殖云はの云はを云はう云は儂云はら云はふ云はる云は一云は師儂人四人云は倭儂師儂也

儂の名云はて倭舞云はの田名云はい云はる云はつ云は右云は著云は甲云は並云は持云は刀云は楯云はと云はあり云は楯云はと云は

諸共云は儂云はとい云はる云は詳云はら云はぬ云は事云はら云は楯云は儂云は十人云は五人云は土師云は宿云は祢云は五人云は文忌云は已云は守云は等



名義を以て持て置 筑紫儂二十人 諸縣師一人 舞人十人 舞人八人 著申  
を以て服従の状を有けむ 持刀禁止三人 歌師四人 立歌三人 大歌笛  
師兼知横笛とありしは 諸縣舞と二舞と 度羅舞 師一人 歌師一人 舞人一人  
ひとつとありし舞ふは 諸縣師ありしとありし  
年五月丁巳 耽羅始遣 王子阿波伎等 貢獻 三云 耽羅入朝始于此  
時といは 比國の儂曲なる 國名は賦役令貢獻の条より云ふ 波理舞六人 持刀  
植舞四人 久太舞二十人 邪禁女儂五人 三人儂人 三人花取舞 三人禁女舞 女  
持持立

とあり 比類ふる 雜舞といふ 儂生一百人 上小い 雜舞を習ふといふ 聖武  
紀 天平三年七月乙亥 定 雅樂雜樂生員 云 諸縣儂生八人 筑紫儂生二十人 云

度羅諸縣筑紫舞生並取樂戸といふ 諸縣と筑紫は各別の舞ありしを 集解  
別記に筑紫を載て 諸縣を略し

既く絶し 故とむ 諸縣は和名抄より日向國郡名云 諸縣年良加多と訓より 按  
應神紀に日向諸縣君年任于朝廷 年既老矣 尚之不能在 仍致仕退 於本土云 天皇  
幸淡路嶋而遊獵之 於是天皇西望之 數十糜鹿浮海菜之便入 播磨鹿子水門  
天皇謂左右曰 其何糜鹿也 泛巨海多未爰 左右共視而奇 則遣使令察使者至  
見皆人也 唯以著角鹿皮為衣服 耳問曰 誰人也 對曰 諸縣君云 不得忘朝故 以  
已女髮長媛而貢上矣 凡水手曰 鹿子蓋 始起于是時也 記 此形狀を儂といふ  
しるをも 諸縣といふは 比國の儂曲なる 國名は賦役令貢獻の条より云ふ 波理舞六人 持刀  
植舞四人 久太舞二十人 邪禁女儂五人 三人儂人 三人花取舞 三人禁女舞 女  
持持立

曰九諸歌男歌女笛者即傳已子孫令習歌笛といふ 歌笛は樂笛 雅樂式九諸  
と異ふる

樂横笛師等不解和笛不得任用といふ 和笛も歌笛も 又按ふに和と和笛  
の義も志れか

此笛生りて笛師なきを古より疑はる 類聚國史 職官 大同四年三月丙寅 定 雅樂寮  
雜樂師歌儂師四人 笛師一人 といふ 比格小笛師ありしを 余子女を 笛師ありし 唯小

からむと古人の説ありし 儂師は即ち笛師なりしを 比格小笛師ありしを 余子女を 笛師ありし 唯小  
いさくも考ふる有けむ 儂師は即ち笛師なりしを 比格小笛師ありしを 余子女を 笛師ありし 唯小  
儂師を笛師と定むるを 樂師の 大同四年の格文は 歌儂師と笛師とに分け置る 制は  
樂生も琴笛を教ふるも 大同四年の格文は 歌儂師と笛師とに分け置る 制は  
了故に 笛師をいへるものなり 歌笛は和笛より 唐笛又對いへる 習 雜笛は  
其唐笛の師は 樂師の中より

雜儂の笛あり 笛工は考へば 按ふに 説あり 一は 工匠にて 歌笛を作るをいふ  
二は 彼天武紀に 傳已子孫令習歌笛といふ 戸の比 察より 直といへるものありし

此註は 伎樂 註 小笛工とは 比國の樂笛を吹て 其事は 供奉者あり 其唐諸樂の  
小いなり 吹笛は 各其樂生の中より 是は 和笛なりといふ 事とき 集解 小笛工謂 笛吹也

笛工八人 儂師教習 儂生所吹 笛者といふ 者といへるは 小いなり 是は 異  
もなきを 儂生も 教ふる 笛吹といふ 事とき 集解 小笛工謂 笛吹也

此と開日ハ笛をも師小受くハ一笛工の教授云ハカ  
此説も笛師のなきを以てかくいへるをむいむいハカ  
唐樂師十二人類

聚國史職官大同四年三月丙寅定樂師員唐樂師十二人新羅樂師四人云集解

別記云大同四年三月廿八日官符云唐樂師十二人橫笛師合笙師箏師篳篥師

方磬鼓師尺八師笙篥師琵琶師雜色の師見ゆ各一師して十樂人十人歌舞師二人唐樂七和名

抄曲調小白帝破陳樂唐禮樂志唐之制樂凡三大舞一曰七德舞二曰九功舞三曰

相共作秦王破陣樂曲上元舞七德舞本名秦王破陣樂太宗為秦王破劉武周軍中

後更製歌辭人破銀甲執戟而舞凡三變每變為四陣象擊刺往來歌者和曰秦王破陣樂

名曰七德舞後更製歌辭上元樂同志高宗上元年中自所作舞者百八十人玉樹後庭

花陳後主孫元心制頌頌孟樂唐太宗因内宴詔長大定樂太宗將伐高麗作樂秦王破

陣樂武后毀唐大廟七德九功文舞皆亡唯其名存武后毀唐大廟七德九功文舞皆亡唯其名存

老三洲曲所出見此師は樂生を教習の職ふん新羅高麗百濟の樂師准知きを

いふかく准此は本註を加ヤコセリ樂生六十人習樂の生之餘の樂生も同聖武紀天平三

年秋七月己亥定雅樂寮雜樂生員大唐樂三十九人云其大唐樂生不言夏

蕃取堪教習者とい夏は皇國蕃は唐より古は歸化の唐人樂師は此樂生

の優長を簡ひ充る多から事戶令よ夏の義は賦役令よ云天平七年正月庚申入唐廻使及唐人奏唐樂高麗

紀天平神護元年十月戊子幸弓削寺禮佛奏唐高麗於庭雅樂式相

左唐樂右高麗樂高麗樂師は高麗樂を教師かり和名抄曲調高麗樂

曲新鳥蘇古鳥蘇鳥はハ迦樓頻加陵頻加の鳥云伯鈞酣醉樂數十曲見ゆ唐禮

小東夷樂有天武紀十二年正月丙午是日奏高麗百濟新羅三國樂於庭

中高麗百濟百濟樂を欽明紀十五年二月百濟國奉勅貢樂人施德三斤

李德已麻次奉德進奴對德進陀等皆諸代之レあり此時より百濟樂を傳

始のレふらむ施德李德對德は百濟の和名抄調曲此樂曲ありハレ考へ

ハ唐禮樂志小至唐東夷樂有高麗百濟中宗時百濟樂二人類聚國史職

部小大同四年三月丙寅定樂師之員高麗樂師四人橫笛師笙篥師百

清樂師四人同上見ゆ和名抄音樂小笙候空候二音俗云如江湖二音楊氏漢

語抄云笙候百濟國琴也和名

久太良 樂器也漢武時人依琴製之 雅樂式云篋候一面 莫日本朝格云莫年師

古止 樂器也漢武時人依琴製之 長五尺糸二兩見ゆ 莫日本朝格云莫年師

一人年或作目俗 百濟樂に舞師の事物は見えぬと唐礼樂志に百濟僊者二

云万久毛 人有箏笛桃皮感箏篋篋候歌而已と見ゆ莫年の事はいふ

按 莫年ハ管箏の類とす 樂生の事は下 新羅の 新羅樂師四

人は類聚國史大同四年格に新羅樂師四人 舞師度羅樂師二人 鼓師右依旧

為定餘皆停止 集解古記弘仁十年十二月廿一日官符決定新羅樂師四人今定

二人 琴師一員 舞師一員 減せられた 度羅樂師は上文小見ゆ其樂は齊帝紀天平宝字七年

林邑等樂 見ゆ大同四年官符に皮樂林邑樂と並記 此樂は允恭紀四十二年正

月戊子新羅王間天皇既崩驚愁之貢上調八十艘及種々樂八千と始て見え聖武

紀天平七年正月庚申入唐廻使及唐人奏唐樂新羅樂持槍といへり 持槍は和名抄

古斗利 和名抄 曲調云新羅陵王 陵王は北齊の武陵王印山の戦に鐵面 小手槍和名抄

一人新羅琴和名之良政古止今案所出在十二絃其名甲乙丙丁戊己庚辛壬癸

未詳疑自新羅國來歟 天地見譜雅樂式に新羅琴一面 長五尺料とあり 此國の樂器は此一色ののみあり同式小

凡賜着客宴郷食日官人率雜樂人供事所須樂聲臨時聽官處分す凡七月上

旬差官人並雜樂人等分配左右相撲司 左唐樂右 高麗樂 此は高麗樂了三國の樂もい

凡雜樂師有闕者不問生徒及入色簡取伎業優長者申省省丞已上試

訖具狀申官といへり 樂生二十人聖武紀天平三年秋七月乙亥定雅樂寮雜

樂生員唐樂生三十九人百濟樂生二十六人高麗樂生八人新羅樂生四度

羅樂生六十人百濟高麗新羅等樂生並取當番堪學者雅樂式に凡雜

樂師云其生者簡才申省省亦試練申官補之 省亦試練は本文小試

伎樂は吳樂 ありて之を伎といふ 手伎の藝樂とて上といへる本樂小異ふを云へ

り伎樂は俗部の樂曲 其樂も異ふを註し腰鼓を吳樂の器と記す此樂の始は推古

紀二十年五月百濟人味摩之師化日學于吳得伎樂傳則安置櫻井而集少年

令習伎樂於是真野首弟子新漢齊文二人習之傳其傳 弟子は人

紀天平宝字五年七月甲子高野天皇及帝幸樂師寺礼佛奏吳樂於庭見ゆ

名を記す

師一人集解大同四年三月廿八日官符云伎樂師二人元一人今置一人林邑樂師二人今置一人

此官符は類聚國史日本後紀の同年三月丙寅とあり上は雅樂式云伎樂の事は見えたり

内教坊を置す林邑並雜樂具は見えたり

之腰鼓生准此とあり

唐令云高麗伎一部横笛腰鼓各一腰鼓俗云三乃豆々美

本朝令云要鼓師腰鼓讀久礼豆

也とあり

三乃豆々美は身の鼓めて身又繋る鼓めて腰のたたり又あはれ腰鼓といはん

也とあり

三乃豆々美は身の鼓めて身又繋る鼓めて腰のたたり又あはれ腰鼓といはん

也とあり

三乃豆々美は身の鼓めて身又繋る鼓めて腰のたたり又あはれ腰鼓といはん

也とあり

三乃豆々美は身の鼓めて身又繋る鼓めて腰のたたり又あはれ腰鼓といはん

也とあり

三乃豆々美は身の鼓めて身又繋る鼓めて腰のたたり又あはれ腰鼓といはん

也とあり

三乃豆々美は身の鼓めて身又繋る鼓めて腰のたたり又あはれ腰鼓といはん

也とあり

三乃豆々美は身の鼓めて身又繋る鼓めて腰のたたり又あはれ腰鼓といはん

也とあり

天國排開廣庭天皇謚欽

御世隨使大伴佐三比古持伎樂調度一具等入朝云奉度

伎樂一具今在大寺と見ゆして推古御代以前より伎樂の具は未だつるふ

天武紀小朱鳥元年四月壬午為卿食新羅客等運川原寺伎樂於筑紫

あり雅樂式云凡每年六月曝涼林邑並雜樂具

とあり雜樂は伎樂の具ときこゆは雅樂の量とあり

腰鼓生の員は記云八上小

いふ伎樂戸の中にあつて

臨時小樂戸を召後上内教坊を置す

坊に隸り大炊式小内教坊の名見ゆ

置内教坊干禁中とあり

皇制も准置す

七月壬辰勅解却雜色長上五十四人散樂戸とあり

又復置す

四月八月七月十五日齋會分充伎樂人於東西二寺並寮官詣寺檢校前會三日官

人史生各就樂戸郷簡充

大寺は西大寺東大寺

樂戸郷は地名

屋神社あり

和名同郡の郷名は杜屋

和名同郡の郷名は杜屋

此社は忍海郡笛吹山ありと云ふて山名社號は旧名残せるものにて笛吹の此社のり  
小住人志門く樂戸の神社の辺にその考ふく臨時祭式小年中御下料波波加木皮者  
仰大和國有封社令採進之と云はる笛集解小古記歌人及歌女笛吹右三色人等男於  
吹の社も古有封の社ありくも考ふく一歌人及歌女笛吹右三色人等男於  
其身免課役女給養丁也小は樂館小上直の制あり其歌人歌女樂世九戸 吳樂の樂生  
腰鼓生七本  
此戸をいふものなり 木登八戸奈良笛吹九戸右三等入等在倭國臨時召之當寮常為  
學習耳各品部所謂免雜徭と見ゆ此笛吹は奈良小住の笛工す木登は廣瀨郡  
城戸郷見ゆ此八戸も彼樂ふる一人も大和乃彼樂世九戸の在處詳かざる或いは  
今世奈  
良よ冷人家ありといふ皆伯の姓氏あり果ふれも高麗國人帰化の子孫なるべし  
和名抄山城國相樂郡大柏下伯の二郷あり是より出ふる又大和國廣瀨郡小下向郷あり下向郷の三  
字土納めこの何社なり 聖武紀天平三年秋七月乙亥定雅樂寮雜樂生云但度羅樂  
筑紫儂生並取樂戸との格よしと此樂儂も彼字に似たりなるむ 使部二十人  
式部式十人を見ゆ 此省に史生を置けは類聚國史職官部小大同四年三月減雅樂寮史  
生とあるは以前に置けたるも式部式に雅樂寮史生四人と記せり

### 玄蕃寮

頭一人掌佛寺僧尼名籍 謂在京並諸國佛 寺及僧尼名籍也 蕃客辞

見讌饗送迎 謂凡諸蕃入朝者始自入城終于辞別 讌饗送迎等皆惣主知其送迎者唯於

京内不出 及在京夷狄監當館舍 謂鴻臚 事  
畿外也

助一人大允一人少允一人大属一人少属一人

史生四人使部二十人直丁二人

玄蕃寮は法師宿客と掌司なり 法師は僧尼宿客は殊俗の朝聘貢使をいふ  
玄を保守之とよむは唐六典に崇玄署掌道士  
女冠僧尼と有り開元二十五年置崇玄學於玄元皇帝廟と有り玄は老子の字にて  
道士をいふ 道士女冠や掌司より僧尼を兼するなり 唐制より僧尼の司

小玄字を用ひらるゝものありて皇國に道士女冠の徒蕃は諸蕃西蕃の蕃あり  
なき故あり女冠は女道まで聖冠を服するの名を負ふり  
古へ異國より帰化の僧及人民の多れは比司を置かざりてふらむ  
佛寺の始は欽

明紀二十三年冬十月百濟聖明王遣西部姬氏達卒怒喇斯致契等獻釋迦佛金

銅像一軀幡蓋若干經論若干云稱目宿稱安置小經田家淨捨向原家為寺と

記せり達卒は官名怒喇斯致契五字は人名なり此文いと長れて要を取り敏達紀一  
省きしれと佛より寺に連ねいへり委く僧尼令載(き)あり

十三年云蘇我馬子宿禰於石川宅修治佛殿馬子宿禰は稱目推古紀二年春二  
宿禰の子あり

月丙寅朔詔皇太子及大臣令興隆三宝是時諸臣連等各為君親之恩競造佛

舍即是謂寺焉との勅旨あり寺を多く造り始めむ同紀三十三年秋九月丙子校

寺及僧尼具錄云當是時有寺四十六所あり此後大室年中まは幾許ともか  
そへかからへて寺と互羅と

訓むは互羅復の義ならむ佛像の白毫金色のみみれはてて佛殿の莊嚴をいふ家へ

異國より佛寺の始は法華經疏曰後漢明帝之時摩騰自西域白馬驮經來初止  
鴻臚寺為創立白馬寺後遂名浮屠居曰寺とあり按漢以來九卿治務之局曰寺

一作序と云へ其鴻臚寺の寺を取て佛殿の名と定めたりとも佛殿と寺といふはあり  
先

僧尼名籍は男僧女僧の名帳あり僧尼の始は僧  
尼今といへり雜令僧尼在京國官司每六年造籍

三通一通留職國以外申大政官一通送中務一通送治部京國は左京右京職  
國は諸國司といふ

此寮は本司ふし其名帳を省より附ふるべし註在京諸國の佛寺僧尼名帳

と云ふ此義あり推古紀三十二年小當是時有寺四十六所僧八百十六人尼五百六十

の不一か元正紀靈龜元年十月丁亥治部省奏言勘檢京及諸國名籍或入道

元由被陳不明或名存網帳還落官籍或形貌誌屢既不相當私名抄子黒子  
今中國呼鷹子

異楚俗謂惣一千一百二十二人准量格式合給公驗不知處分伏聽天裁詔報曰

白鳳采朱雀以前年代玄遠尋問難明亦所司記注多有粗略一定見名

仍給公驗白鳳元年は即ち天武天皇元年朱雀は朱鳥元年よて此御代十五年あり

海東諸國紀は此年號を記せり異國も聞傳(け)む先仁紀靈龜十年八月唐由治

部省奏曰大室元年以降僧尼雖有本籍未知存亡是以諸國名帳無由計會望

請重仰所由令陳往處在不之狀然則官僧已明私度自止於是下知諸國令

取治部處分所由は諸國名帳未  
知存亡所由の國あり 癸亥治部省言今檢造僧尼本籍計會内外諸寺

名籍國分僧尼在京者多望請借住先御願皆歸本國者大政官處分如行具

足情願借住且依願聽以外悉還焉諸國より上京の僧多く  
借住をふりて歸さざる故あり 治部式凡

威儀師已上及諸國講讀師補任帳各一卷年終勘作正月一日進大政官ふとを

考ふに在京僧尼諸國僧尼も補任三色名帳あり諸國の僧も在京借住は京  
職の名帳に載せざるあり

蕃客辭見は來る日拜朝を見し歸る日拜朝を辭といふ詳見の義は  
儀制令よ云 聖武

紀天平四年五月壬子新羅使金長孫等入京庚申金長孫等拜朝壬戌卿食金長

孫等於朝堂宴訖賜新羅王並使人等祿六月丁酉新羅使還蕃式部式受諸  
蕃使

表及信物各其日式部設使者版位於龍尾道南庭設庭實位於客前諸衛立

仗各有常儀群臣五位已上六位以下左右分入使者服其國服入如常儀と

あり庭實は貢  
物をいへり 燕饗は拜朝の日宴を給ふ燕宴  
同 集解十日燕大日

饗とあり小は拜朝の外其館にて  
宴を給ふをいへり 饗は給祿あり聖武紀神龜四年渤海郡王

遣寧遠將軍高仁義等二十四人來聘云五年正月甲寅天皇御中宮高德齊

等上其書並方物於是高德齊等八人並授正六位上賜當色服宴五位以上及

宴訖賜祿蕃使は位級を給ふは朝堂にて五位以上と  
班列する使くは位級をたふ高下ある故あり 式部式賜蕃國  
使宴 前一日輔

丞錄率史生省掌置版位並立標當日參議以上就延英堂云 治部式蕃

引客徒參入拜舞之後輔丞錄入自儀鸞門立治部西辺宣命之後叙客徒

宴畢輔丞錄唱名大藏省賜祿叙客徒は叙位を治部式に凡蕃客入  
朝者共食者二人掌饗日各對客使者飲

減綿二屯布二端即參向皇朝准此法給自餘不用此式見は朝堂の宴  
使の例あり

送迎は客徒の入京上迎歸京を送る京城外  
は山城國 皆京場限外は及 司道路の送迎了 領歸御客使

各天隨使各二人道路の雜事を勤也 光仁紀室龜十年四月庚子唐客入京將軍等

率騎兵二百迎接於京城門外三橋とあり 送るも同大藏式に凡蕃客來朝

官人使 生率藏部等向郊勞處設 帷幔と 客徒上迎饗食をて此事は  
其處を設くるあり

官人使 生率藏部等向郊勞處設帷幔と 客徒上迎饗食をて此事は

京中に迎へて京外へ送り出さず始終客使の事を掌り在京夷狄は蕃

客在京は此寮の掌事といふ 監當館舎は蕃客の館舎を監臨

主當の職をいふ夷狄此館に宿するを 其守衛は京職の預る一聖武紀天平四

年冬十月癸酉始置造客館司とあり後木工寮の職とある類聚國史職

部貞觀十五年三月廿八日壬辰勅令木工寮典右京職共監護鴻臚館同

十六年五月廿八日乙卯先是右京職木工寮相共監護鴻臚館若檢校疎

畧有致破損寮職長官遷替之同物以解由と見えり玄蕃は監當木工

已行此館舎を鴻臚館と云ふ鴻臚は漢百官志典客寮奉官大初元年更典

行設九賓臚向傳注小向臚轉為鴻臚客名大鴻臚とあり叔孫通列傳大

上傳語告下為臚鴻飛有行列百官之家とあると取て官名とせり 鴻雁

の春秋の時を遠く傳へる朝の義あり漢以來は蕃客を掌り官を鴻臚東

西二館ある在京職式左京者鴻臚東館左京者鴻臚西館客使入朝之

時均分客館之内左右京共掃除云九蕃客入朝者進属史生各一人率

書生二人兵士六人禁衛館東門右京禁衛南門准比南門掖造假屋官人

請と監護の事清を記せり史生四人式部式史生四人使部二十人同式小

使部十人とり三代實録貞觀六年十一月四日丁亥始置玄蕃寮寮掌一

員と見えて式部式寮掌二人見ゆ

諸陵司

正一人掌祭陵靈謂十二月奉荷前 喪葬凶礼諸陵

幣是也陵同墓

及陵戸名籍事謂戸令云雜戸陵戸籍

則更寫一通各送本司

佑一人令史一人



土部十人掌贊相凶礼 謂凶礼者送終之礼即土師宿祢年位高進者為大連其

次為小連並紫衣刀劍世 員外臨時取充 謂此長官執凶儀其文多故不載也 之職掌而

於此注者隨 起事无別例 使部十人直丁一人

諸陵司は先代諸天子の御陵の事を掌りて陵を天皇の御墳墓と稱 と號り喪葬令山陵註小帝王墳墓如山如陵故謂之山陵とあり和名抄に釋

名云土山曰阜大阜曰陵と見ゆ 土山の岡の狀をいふ孝德紀管墓の制小玉以上墓高九尋上臣之墓高三尋下臣墓高二尋半と

ありは天皇の墓をいふ高く大なるは陵の如くふるふは雅注に帝王葬所曰山陵古者土民墓地亦曰陵秦惠文王稱陵民不得僭稱也といへ秦の制は註小陵同墓と記せり天子小陵臣下小墓と文字の異して同義をさしせり聖武紀天平元年八月癸亥詔小諸大陵差使奉幣其改諸陵司為寮増員加秩と有りて諸陵寮と改め

られり 集解小同年八月五日詔改司為寮とあり増員寮官を置るをいふ 司の正佐を罷め頭九属 各一人は少寮の制あり 祭陵靈は御陵の神靈を祭るをいへり天子御陵

を祭るは天武紀元年小高市郡大領高市縣主許梅儻忽口閉而不能言也三 日後方著神云乃顯之曰於神日本磐余彦天皇之陵奉馬及種々兵器云云

便遣杵梅而祭拜御陵因以奉馬及兵器始て見せり 神代紀小伊弉册尊云云葬於紀伊國熊野之

有馬村焉士俗祭此神之魂者花時以花祭又用鼓吹幡旗 歌舞而祭矣と古く見ゆは土俗の祭を天子の祭らるるあり 諸陵式小十陵八墓祭

らる制を立り 十陵は天子の近親の山陵八墓は有切の諸臣の墓をいへり 註小十二月奉荷前は年の終幣帛 を奉るをいふ 皇年代紀小持統天皇十一年初行荷前祭と荷前は諸國貢調の荷

よりまら此御料と取出置き年の終奉る幣物といへり 神祇小奉らる初穂 中務 式小凡十二月奉諸陵幣者令陰陽寮擇日訖即申官其使參議内舍人大舍人

各有差諸陵式小凡每年十二月奉幣諸陵及墓云省申官領幣 有 差各陵 墓預人奉但神功皇后陵差 其領幣之時申詞陵称献出墓称申出とあり 寮主典已上奉

預人は陵戸の長ふる一献出申出は君臣の辞差別あるをいへり 喪葬凶礼を  
神功皇后添下郡狹城盾列池上陵も官人の祭るべき喪葬令に云々

喪制葬儀をて凶事の礼儀あり皆死者事ふるをいへり下 喪葬令に見えり

諸陵は上云々 陵戸名籍は諸陵守衛を灑掃する戸人の名帳あり戸令ふ

雜戸籍各送本司と可る本司は此司と名帳を掌る下 諸陵式に九陵戸及守戸

計帳者寮差專當人注名申省分遣本御英國司共相知勘造其戸籍亦差遣

專當官人勘造と可る 本御は陵戸の 喪葬令に九先皇陵置置陵戸令守非陵戸令

守者十年一替と陵戸と守戸の二色あり 陵戸は平民の例あり持統紀に五年十月

乙巳詔曰九先皇陵戸者置五戸以上自餘玉等有功者置三戸若陵戸不足以百姓

充免其徭役三年一替の制を立りし 此百姓を充るは守戸もて 新令の時十年替

と改めしと見ゆ元明紀靈龜元年夏四月庚申櫛見山陵充守陵三戸伏見山陵四

戸と可るは此陵戸の絶るをもて充る可る也 諸陵式菅原伏見西陵石上穴穗宮

陵纏向珠城宮御守垂仁天皇守戸三烟 諸陵式に九山陵者置置陵戸五烟有功臣

墓戸三烟と定め記す 近白親曰近陵諸陵を美佐岐に義は下 喪葬令に云々

集解 古記 常陵守及墓守並八十四戸 倭國廿七戸 河内國廿七戸 免調庸公計

帳文莫納別計帳也 陵戸は賤民の故其借陵守及墓守並百五十戸 京三十

倭國五十八戸 川内國五十七戸 紀伊國 右件戸納官計帳文而記借陵守也

三戸山代國三戸伊勢國三戸 あり 借陵守は良民をもて其計帳代 陵戸守戸九二百三十四戸あり 集解の文記す

もは借墓守四國まで七十七戸借墓守六國百四十一戸あり 諸陵式諸陵の本御と計

紀伊一伊勢一をて墓八所墓戸四十五戸と西戸二百四十戸あり 依以下官人は寮に

改められ 後より助允届を増加へらるる也 諸陵式に主典 類聚國史 第一百七

曆廿一年十二月癸巳始置諸陵寮史生四員とあり 此同はもと史一人あり寮に改められ

式部式に諸陵寮史生四人使部十人と記せり 土師は波志 凶礼を執る名負人

あるをもて直土師と職名せり 曼下執業の氏人 喪葬令に三位以上皇親皆土

師示礼制とあり 尚書録に別局あり 質相凶礼は凶事の礼制にて死者

の終を送る礼をしまくるをいふ 終は送葬して其葬儀を助け行ふをいふ 此生師十員の中、老年高位を以

て大連と、其次を小連と定む 諸司の例よりは大連を長官、小連を次官と云ふ 此の連姓をりし日、此名

を定て後、かく云傳へしものとき、この礼記雜記篇、孔子曰、大連少連、善居喪、三日

居喪をかり職名とせしも、おもへど、此氏人は 不怠三月不解期悲哀ス三年憂と云義あり善

古より土師連といふ此連より出て大小を分る也 天武紀十三年十二月己卯土師連賜姓

曰宿祢とあり 註、大連少連の礼制を示す日、紫衣刀劔を服て凶礼を賢相け世

凶儀を執掌する其故事の文詞多かり 註、小省き載せぬより、衣服の紫色は三位以

借し用ふるを思ふ 按、小垂仁紀二十八年十月丁酉葬倭彦命、干身狹桃花鳥坂

於是集近習者、悉生而埋、立於陵域、數日不死、晝夜泣吟、遂死、天皇聞、此泣吟之

声、心有悲傷、詔群臣曰、夫以生所愛、令殉亡者、是甚傷矣、其雖古風之非良、何

從自今以後、議之止、殉と詔勅あり、同三十二年秋七月己卯、皇后月葉酢媛命

薨臨葬、有日焉、天皇詔群卿曰、從死之道、前知不可、今此行之葬、為奈之何、於是

野見宿祢進曰、夫君王陵墓、埋立生人、是不良也、豈得傳後葉乎 云、則使者喚上

出雲國土部壹佰人、自領土部取、殖以造作人馬及種々物形、獻于天皇、曰、自今

以後、以是土物更易生人、樹於陵墓、為後葉之法則 云、其土物始立于月葉

酢媛命之墓、仍號是土物謂殖輪 亦名仍下、令曰、自今以後、陵墓必樹是土物

無傷人焉、天白王厚賞野見宿祢之功、即任土部職、因改本姓謂土師、臣是土

部連等主、天白王喪葬之縁也、凶儀を執り始め見え、猶下喪葬令 云、一

員外臨時取充は本註あり 此六字、古本に見え、へり集解、大字に記せ

使云、巡察事條及使人數臨時量定と十二字、本文に記り、土師十員と定むと

混じり、同、か、い、令、制、は、常、典、よ、て、臨、時、の、格、を、載、き、ま、り、ま、す 註、此は長官の職掌

を、い、ふ、記、を、便、利、の、ま、く、職、事、の、制、を、起、し、て、別、小、異、例、が、と、本、文、の、如、く、い、ふ、は

い、つ、り、大、政、官、大、納、言、の、条、註、小、其、兼、彈、者、雖、是、左、右、大、臣、尚、不、得、為、職、掌、故、職、掌

之、未、別、起、而、注、と、兼、職、は、職、掌、の、未、上、起、及、例、を、記、神、祇、伯、の、条、註、小、欲、顯

は、有、へ、り、を、長、官、職、掌、の、故、小、便、宜、小、職、事、を、起、す、は、い、ふ、る、事、に、詳、か、ら、ず、及、令、文、小

長、官、の、事、な、け、り、存、り、其、大、連、は、長、官、有、り、り、れ、と、明、文、有、り、或、説、に、員、外、は、大、連、少

連、二、入、繁、多、の、日、員、外、の、人、を、取、充、て、權、小、二、連、の、事、を、行、ふ、と、い、ふ、は、ま、り、

喪儀司

正一人掌凶事儀式及喪葬之具

佑一人令史一人使部六人直丁一人

喪儀司は喪葬の儀式を掌り

土師は礼制を示教之集解古小大同三年正月廿日

格小其喪儀司併鼓吹司とあり

類聚國史職官部

凶事儀式は送葬の儀式にて

集解小金鉦鏡鼓行列法式謂之儀式とあり

此格文見たり

凶事函簿の次第下喪葬令

へー 喪葬之具は輜車方相殯斂調度の類なり喪葬令註小葬具者帷帳之屬也

同令小凡官人從征行使人所在身喪皆給殯斂調度とあり此司より給ふなり孝

德紀大化二年管墓の制小王以上葬時帷帳等用白布有輜車上臣葬時帷帳等用

白布下臣云亦准於上凡王以下十智以上其帷帳宜用白布庶人帷帳等可用鹿

布凡王以下及至庶民不得管殯と始制を立給へり帷帳は葬所小集解小依喪葬

令臣下喪葬可知といは此司を置也皇親以上の儀式にて臣下の制に及たぬ

をいへり然るへくきこゆ

卷之二

正一人全...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

